

「知床」世界遺産登録時に決議された調査団の調査結果について

1. 背景と目的

平成17年7月の第29回世界遺産委員会において、「知床」が世界自然遺産に登録された際の決議に基づいて、海域管理計画の策定状況や遺産地域の海洋資源の保全の効果、その他の勧告事項への取組状況などを評価するための調査団を招聘したものの。

2. 調査期間

平成20年2月19日（火）～22日（金）（4日間）

3. 調査団員

キショール・ラオ氏（Mr. Kishore Rao）
（ユネスコ世界遺産センター次長）
デビッド・シェパード氏（Mr. David Sheppard）
（IUCN保護地域事業部長）

4. 調査日程

日程	調査内容	宿泊地
2月18日（月）	来日	東京
2月19日（火）	環境大臣表敬 日本政府による遺産登録後の経過説明 東京から羅臼町へ移動 レセプション（地元主催）	羅臼 （北海道）
2月20日（水）	海域管理計画に関する意見交換会 現地視察（漁港、オオワシ・オジロワシ観察、羅臼ビジターセンター）	ウトロ （北海道）
2月21日（木）	登録後の取組状況に関する説明会 ・ 河川工作物の評価・改修について ・ エゾシカの保護管理について ・ 利用適正化に向けた取組について ・ エコツーリズムの推進について 現地視察（河川工作物、流氷など）	ウトロ （北海道）
2月22日（金）	地域の取組に関する関係団体との意見交換会 記者会見 ウトロから東京へ移動	東京
2月23日（土）	離日	

5. 登録後の取組についての調査団の現地における評価

○登録後のこれまでの取組全体に対する評価

- ・世界遺産委員会及びIUCNから出されていた課題については、継続的な対応が必要だが、大変良く対応されており、すばらしいスタートが切られている
- ・取組に当たり、特に地元との協議の上で科学的知見を取り入れつつ検討がなされていることを高く評価

○エゾシカ対策の取組に対する評価

- ・個体数調整等の現在の取組の方向性を支持する
- ・植生や生態系への影響を見るための指標を開発し、今後の方向性の検討に生かすべき

○海域の管理に対する評価

- ・海域管理計画を多くの関係者が関与して策定したことを評価
- ・海洋生態系の保護と漁業のバランスが維持されていれば、禁漁区という言葉を使う必要はない
- ・地元の漁業者の経験と知見を活用していくことが重要
- ・トドは国際的に絶滅危惧種であり、注意深く監視していくことが必要

○河川工作物改良に対する評価

- ・科学的に検討が行われ、具体的な改良が行われていることを評価。
- ・今後、サケ科魚類の自然な生息環境を確保するための長期的な戦略が必要。
- ・ルシャ川のダムについては、将来的には撤去することが望ましいが、直ちに行うことは適当ではなく、長期的な観点で取り組むことが重要。

○気候変動への対応について

- ・気候変動は世界中のあらゆる場所で影響があるが、「北半球で最も低緯度の海氷域」であるという特徴を有する知床は、温暖化の影響を受けやすい遺産であり、気候変動に関して注意深く、長期的にモニタリングしていくことが必要
- ・気候変動について科学委員会で議論することも必要であり、気候変動WGを設置することも一案
- ・知床以外の遺産地域との意見交換も必要

○今後の予定について

- ・今回の調査を踏まえた調査団からのコメントは、今後ユネスコとIUCNにより作成され、日本政府とのやりとりを踏まえて本年7月の世界遺産委員会に報告される予定